

メンテスによるテレマコスの教育 (『オデュッセイア』第1巻80行~324行)

鈴木 円

The Education of Telemachus by Mentès in the *Odyssey* 1. 80-324

Madoka Suzuki

Abstract

This paper analyses the dialogue of Telemachus and Mentès in the *Odyssey* 1. 80-324 and clarifies the characteristics of the education of Telemachus by Mentès. The educational relationship between Telemachus and Mentès is recognized as a typical teacher-student relationship in Western Europe along with the relationship of Phoenix and Achilles in the *Iliad* 9. 434-605.

The following three characteristics can be pointed out about the “teacher” Mentès: he reminds his student of his father, he teaches words and deeds, and he teaches morals using examples called *paradeigma*. Because these characteristics are shared by Phoenix, they are considered a model of ancient Greek education.

The following characteristic can be pointed out about the “student” Telemachus: he fully accepts the instructions of his teacher. This characteristic is the opposite to that of Achilles. Compared to Achilles, Telemachus was inexperienced and dependent. Therefore, Telemachus obediently listened to his teacher’s words and acted according to his teacher’s advice. As a result, he could achieve his growth and learn autonomy.

These characteristics of Mentès and Telemachus provide insights applicable to education today.

Key words: the *Odyssey* (『オデュッセイア』), *Telemachus* (テレマコス), *Mentès* (メンテス), *teacher-student relationship* (教師生徒関係), *educational model* (教育の型)

はじめに—研究の目的—

本論文は、『オデュッセイア』第1巻におけるオデュッセウスの子テレマコスとメンテスの対話を年長者の青年に対する教育的意図をもった対話と捉え、その教育の在り方を、先に検討した『イリアス』第9巻におけるアキレウスとポイニクスの関係¹と比較しながら分析することを通して、古代ギリシアにおける教育観の一端を明らかにすることを目的とする。

『オデュッセイア』第1巻から第4巻は、「テレマキア」と呼ばれ、オデュッセウスの子テレマコスを事実上の主人公としている。そこで描かれるテレマコスとメンテス(第1巻)及びメントル(第2巻~第4巻)

1 鈴木円「ポイニクス(『イリアス』第9巻434-605行)にみる教師像」『学苑』第844号, 2011年, 86-97頁.

との関係は、『イリアス』第9巻におけるアキレウスとポイニクスの関係と同様、西欧においてはひとつの典型的な教育関係として認識されている。メンテスとメントルは両者とも女神アテネの化身であり、テレマコスの成長を促す人物として登場するが、この両者の名前の類似は、彼らのアドバイザーとしての役割の類似性を強調する意図で選ばれたものではないかと推定されている²。最近注目されているメンタリングにおける「メンター」がこのメントルの名に由来するとされるのも、テレマコスとメントルとの関係が重要な教育関係の典型と西欧で認識されてきたからに他ならない³。

『オデュッセイア』における「テレマキア」の意味付けについては、古来ホメロス学者たちがさまざまに論じているが、「テレマキア」におけるテレマコスの教育の意味について総合的に分析している研究として最も重要なのは、Werner Jaegerの *Paideia* である⁴。Jaegerは、『オデュッセイア』全体に教育的意図をみてとり、テレマコスの成長が計画的な教育意図をもって描かれたものであるとして、詳細に検討を加えている。また、Henri-Irénée Marrouは、ホメロスが古典期の教育のあらゆる伝統の土台であるとして、テレマコスの教育についても詳細に検討している⁵。我が国では、「テレマキア」における、テレマコスの教育そのものを扱った研究としては、久保正彰がJaegerの考え方に沿って、ホメロスの両叙事詩における「子どもの扱い」について分析するなかでテレマコスの教育を概観し、メンテスを守り役（パイダゴゴス）と位置づけ、見倣うべき手本としてのオレステスの意味、教育における父と子の関係について論じている⁶。その他、「テレマキア」に言及した我が国の研究も数多いが、「テレマキア」の教育論的価値を直接的な考察対象としたものではない⁷。

2 A. Heubeck, S. West, and J. B. Hainsworth, *A Commentary on Homer's Odyssey*, Volume I. Oxford, 1988, p. 89.

3 この「メンター」は、実際には、『オデュッセイア』第2巻以降の登場人物であるメントルではなく、17世紀末にフランスの王太子ブルゴーニュ公の家庭教師であったフェヌロンが、王太子の教育のために著した『テレマックの冒険』に登場するマントル（メントル）に由来するものである。フェヌロンは、ホメロスの『オデュッセイア』のテレマコスとメントルの関係に示唆を受けてこの物語を著しているのだが、もともと教育的意図をもって著された『テレマックの冒険』におけるマントル（メントル）は、『オデュッセイア』におけるメントルと比べ、より教育的で、帝王学の教師らしい人間像として造形されている。

Cf. A. Roberts and A. Chernopiskaya, "A historical account to consider the origins and associations of the term *mentor*", *History of Education Society Bulletin*, 64. 1999, pp. 81-90.

4 W. Jaeger, *Paideia: the Ideals of Greek Culture*, Volume I, second edition (translated by Gilbert Highet). Oxford, 1945, pp. 29-31.

5 Henri-Irénée Marrou『古代教育文化史』（横尾壮英・飯尾都人・岩村清太訳）（東京：岩波書店，1985年），12-24頁。（原書名：*Histoire de l'éducation dans l'Antiquité*. Paris, 1948）

6 久保正彰「古典古代における子どもの発達と教育—ホメロスの両叙事詩を中心として—」大田堯他編『岩波講座 子どもの発達と教育 2 子ども観と発達思想の展開』（東京：岩波書店，1979年），98-125頁。

7 岡道男『『オデュッセイア』におけるテレーマコス』『西洋古典学研究』第13号，1965年，33-50頁。

岡道男『ホメロスにおける伝統の継承と創造』（東京：創文社，1988年），93-107頁。

松本仁助「アテーネーの「忠告」α 271-296」『西洋古典学研究』第14号，1966年，42-56頁。

松本仁助「テレーマコスの「奮起」α 319-444」同志社大学人文学会『人文学』第101号，1968年，1-26頁。

松本仁助「テレーマコスの「駆け引き」β 209-223」同志社大学人文学会『人文学』第110号，1969年，1-26頁。

松本仁助「テレーマコスのスパルター滞在：δ 587-619, ν 412-428, ο 1-184」『西洋古典学研究』第19号，1971年，16-30頁。

松本仁助『『オデュッセイア』におけるテレマコスの旅』『同志社外国文学研究』第21号，1978年，1-24頁。

安村典子『『オデュッセイア』21巻の弓競技におけるテレーマコス』『西洋古典学研究』第55号，2007年，24-37頁など。

本論文では、Jaeger, Marrou, 久保らの研究に学びながら、とくに「テレマキア」のなかでも第1巻のテレマコスとメンテスの対話に限定して分析を試み、年長者と青年の間でどのような教育の型が示されているかを考察し、古代ギリシアの教育観の一端を明らかにしたい。

1. テレマコスとメンテスの対話の概要

まずはじめに、『オデュッセイア』第1巻のテレマコスとメンテスの対話について概観する。

10年間に及ぶトロイア戦争が終わってさらに10年、アカイア人の英雄たちのなかで、ひとりオデュッセウスのみが未だ帰国しない。オデュッセウスは、キュクロプス一族のポリュペモスの目をつぶされたことに腹を立てたポセイダオンによって、帰国の途をとざされているのである。ふるさとのイタケでは、オデュッセウスの妻ペネロペイアが夫の帰りを待ちわびている。しかし、すでに彼を亡き者と思った多くのイタケの貴族たちが、求婚者としてペネロペイアのもとを訪れ、オデュッセウスの館で毎日のように飲み食いし、そのためオデュッセウス家の財産は蕩尽されている。オデュッセウスの一人息子テレマコスは、父の出征のときは赤ん坊であったが、すでに成年に達している。

一方、オリュンポスの神々の世界では、女神アテネが父神ゼウスにオデュッセウスの帰国を進言し、ポセイダオンをのぞくオリュンポスの神々は彼をいかにして帰国させるかを協議している。そこで、彼を帰国させてやりたいと強く願う女神アテネは、オデュッセウスをとらえているカリュプソのもとにヘルメイアスを遣わして神々の決議を伝えるとともに、自身はイタケに行ってテレマコスを激励し、彼がアカイア人らを呼集して、求婚者全員にきっぱりと屋敷で飲み食いすることをやめよと申し渡すことができるよう勇気を吹き込んでやろうと言ひ、さらに父親の帰国について消息が得られるかも知れず、また世間の評判もよくなるから、テレマコスをピュロスとスパルテへ行かせるつもりだと言ひ、早速イタケのオデュッセウスの屋敷に赴く。オデュッセウスの屋敷を訪れた女神アテネは、タポスの王メンテスの姿をとって戸口に立つ。屋敷のなかではまさに求婚者たちが群れ騒いでいる。ひとりメンテスの姿に気づいたテレマコスは、メンテスを作法に則って客人として迎え入れ、食事をふるまう。食事が終わると、彼ら二人の対話が始まるのである。

まずテレマコスは求婚者たちの振舞いを嘆き、父オデュッセウスが帰還すればこのようなことはないであろうに、父は非業の死を遂げ帰国することはもはやないのだと告げてから、メンテスに素性を尋ねる。メンテスは、自分がアンキアロスの子メンテスという者でタポス人を治めており、オデュッセウスとは先祖代々懇意の間柄であり、そのことはラエルテス（屋敷とは離れた田舎に住むオデュッセウスの父）に尋ねればわかると言ひ。さらに続けて、オデュッセウスがすでに帰国していると聞いていたのだが神々が帰国を妨げているのであろうと言ひ、オデュッセウスはやがて必ず帰国するであろうと告げる。それから、テレマコスに対して、オデュッセウスによく似ていることを指摘し彼の子かと問う。テレマコスは、母（ペネロペイア）はいつも自分のことを彼の子だと言っているが、自分ではわからないと言ひ。そして、自分の財産を守りながら年老いるような幸せな父の息子であったならどんなによかったかと思ひ、自分の父といわれる人はこの世で一番不幸な人間だと言ひ。メンテスはそれに対して、ペネロペイアはあなたのような立派な息子を生んだのだから家運は開けるよう神々が定めているに違いないと言ひ、それから求婚者たちについて、いったい何者が何の祝宴をしているのかと尋ね、あまりに傍若無人で無礼であり、このありさまを心ある者が見れば憤慨するであろうと言ひ。テレマコスは、父の消息がわからないために周辺の豪族たちが母に言い寄り家財を蕩尽し

ているが、母はそれを拒みもしないが申し出を受け入れもしないでいると話し、このままでは自分の財産ばかりか自分の身も滅ぼされてしまうだろうと言う。メンテスは憤慨して、オデュッセウスになんとしても帰ってきてもらい求婚者たちを屋敷から追い出してもらわなくてはならないと言う。しかし、それが実現するかどうかは神々の決めることであるから、あなた自身はいかにして屋敷から求婚者どもを追い払うかを考えるように促す。そして、まずアカイア人の集会を催し、求婚者たちに引き上げるように求め、母に対しては、もし結婚する意志があるのであれば実家に帰るよう促すようにと言う。そのうえで、父の消息を尋ねてピュロスのネストルとスパルテのメネラオスを訪ねるように勧める。そしてもし父が存命であることがわかったならば、あと1年は辛抱して帰国を待つように、もし父がこの世の人ではないと聞いたならば、国に帰って父親の墓を築き、母親を再婚させるように勧める。そして、そののち、屋敷の求婚者たちを討ち取る手立てを考えよと言い、父アガメムノンの仇であるアイギストスを討ち果たしたオレストスの話をする。最後に、メンテスはテレマコスの体格を愛で、勇気を出すように言い、連れの者が待つ船へと戻ると告げる。テレマコスは、メンテスに対して、父が我が子に語るような温かい言葉であると感謝し、メンテスをさらにもてなすべく引き留めるが、メンテスは先を急ぐのでと告げてその場を去る。

以上が、『オデュッセイア』第1巻におけるテレマコスとメンテスの対話の概要である。次に、テレマコスが、その成長過程において、どのような問題を抱えているのかを見、そののちに、メンテスの教育の特質について検討したい。

2. テレマコスの抱える問題

テレマコスは自分の生まれた屋敷にあって、成年に達しているにもかかわらず、年齢の割には、成熟していない青年である。オデュッセウスはトロイア遠征に旅立つに際して、妻ペネロペイアに家の万端を託していった (*Od.* 18. 256-270)。それゆえ、テレマコスが幼児のときからオデュッセウス家の主の役割はペネロペイアが代行している。主であるオデュッセウスの帰還を信じて待っている状態のオデュッセウス家では、主が無事帰還するまで、その状態が維持されざるを得ないのである。それゆえ、テレマコスがすでに成年に達しているにもかかわらず、ペネロペイアはずっとテレマコス子どもとして扱っている。ペネロペイアは、テレマコスについて、「まだほんの子供で苦労も知らず、人前で物も十分にいえぬ身 (*Od.* 4. 818)⁸」と評している。このように、屋敷がペネロペイアの管理下にあるため、テレマコスは「子ども」として、求婚者たちの横暴をただ嘆いたり、母の求婚者たちに対するあいまいな態度を批判的に見たりしているだけで、その状況を自ら打開するというには思い及ばないのである。根は素直で、メンテスを客として迎え入れる際などの作法は十分心得ているものの未熟さの目立つ青年である。

そして、このような日々が続いているために、テレマコスは自ら運命を切り開くのではなく、運命に翻弄される受身的な立場をとり続けている。テレマコスは、求婚者たちの傍若無人な振舞いを嘆きながら、オデュッセウスがすでに死んでおり帰国の日は永久に失われたとメンテスに告げている。テレマコスは、オデュッセウスが家にいた頃は家も豊かであったようだと言い、神々が彼を行方知れず

8 以後、『オデュッセイア』の邦訳引用は、とくに注記しない場合は松平千秋訳『ホメロス オデュッセイア (上)』岩波文庫 (東京: 岩波書店, 1994年) による。また、原典引用は、Thomas W. Allen 校訂の OCT 第2版 (1917年) による。

にしてしまっており、いっそ死んだということがはっきりしていれば、アカイア人たちが墓を築いてくれたろうし、我が子のために名誉を残してくれたらうに、行方知れずになってしまったがために、残されたのは苦しみと悲しみのみであり、さらなる災いとして、今度は求婚者たちが家財を蕩尽し、やがては我が身をも滅ぼすだろうと述べる。このように、テレマコスには、我が身と我が家の不幸を神々の定めた運命のせいであるとし、アカイア人が父の墓を築いてくれること、父が名誉を残してくれることなど、すべて自らが何事かを成そうというのではなく、すべて他人任せの受身的な発想で物事を考えているのである。

さらに、テレマコスは父に対して複雑な思いを抱いている。幼いときに父に別れ、父の面影を知らずに育ってきたテレマコスにとっては、英雄オデュッセウスが自分の父親だと聞かされても、全くそのイメージが持てていないのである。メンテスが、テレマコスの容姿がオデュッセウスにとってもよく似ていることを指摘してオデュッセウスの実の子かと問うたときには、「母はわたしが彼の子であるといつも申しておりますが、わたしには判りません。誰も自分の出生について知る筈がありませんから (Od. 1. 216-217)」⁹ とメンテスに答える。さらに、テレマコスは、「わたしは、自分の家財を守りつつ年老いることのできるような、仕合せな父の子であったら、どんなによかったらうかとは思いません (Od. 1. 217-218)」と言い、「わたしの父といわれる人 (τοῦ μ' ἔκ φασι γενέσθαι) は、この世で一番不運な人間だったのです (Od. 1. 219-220)」と言う。オデュッセウスが自分の父であるということは、テレマコスにとっては母ペネロペイアの言い分にすぎず実感のわからない話なのであろう。そして、この父の不在が彼のアイデンティティーを不確かなものにさせており、そのために彼がどう行動してよいか判断がつかない状態となっている。さらに、父が幼い自分のそばにいてくれなかったことに対する恨みにも似た複雑な感情が、英雄である父よりも凡庸であっても自分のそばにいてくれる父を求める気持ちにつながっていると考えられる。オデュッセウスに対して、父に対する憧れや思慕とともに、父を完全には受け入れられない気持ちが、彼のなかで複雑に葛藤している様子がみとれる。

テレマコスは、自らの運命を自らの力で掴み取ることに考え及ばないまま、自分の生まれに自信が持てず求婚者たちに翻弄され続ける日々を送り、父の帰国への期待と絶望、母親への依存と反発など、出口のない悩みにさいなまれているのである。

3. メンテスの教育

さて、このような状態にあるテレマコスに対して、メンテスはどのような「教育」を行ったのであろうか。その検討の前に、メンテスの人物像について確認しておきたい。メンテスは女神アテネの化身である。しかし、神の化身ではあるが、超人間的な能力を示すのはテレマコスとの別れの瞬間に「鳥の如く (Od. 1. 320)」飛び立つときだけである。女神アテネはゼウスの計画の成就のための布石を打つ役割を担っているが、テレマコスとメンテスの間に交わされる対話は別れのその瞬間まで、人間対人間、年長者と青年との間の対話として成り立っているものである。それゆえ、テレマコスとメンテスの対話が、年長者が青年に対して教育的意図をもって語りかけたものとして考察の対象になりうるのである。ここで、テレマコスとメンテスの教育関係を、仮にテレマコスを生徒、メンテスを教

9 B. S. Strauss, *Fathers and Sons in Athens: Ideology and Society in the Era of the Peloponnesian War*. London, 1993, p. 22 は、父子関係は証明することが困難であることを指摘し、この箇所を父子関係のもろさを明確に描いた箇所として指摘している。

師と捉えてみると、彼らの教育関係には、以下の4つの際立った特徴を指摘することができる。

- (1) 「父」を想起させる教師
- (2) 「言葉」と「行い」の教師
- (3) パラダイグマ（範例）を語る教師
- (4) 教師の助言を全面的に受け入れる生徒

以上の4点について、順次、テレマコスとメンテスの教育関係を考察してみたい。

(1) 「父」を想起させる教師

テレマコスの教育において、「父」の想起は、教育の重要な要素となっている。自らの生まれに自信を持たず父の不在をかこつテレマコスにとって、自らが成熟した大人として行動を起こしていく前提として、「父」をどう捉えるかということが重要な発達課題となっている。

このことに関して、メンテスの言葉を見ていこう。テレマコスの生まれに対しては、「神々は、あなたに名もない家柄を将来にわたって残しておくことはされなかった、ペネロペイアはあなたのような御子息をお産みになったのだから (*Od.* 1. 222-223)¹⁰」と言う。

メンテスは、テレマコスの容姿がオデュッセウスに似ていることを指摘していたが、テレマコスの生まれに対する疑念には全くとりあわない。そして、テレマコスがペネロペイアの子であること、今はその名が隠れていようとも、やがて明らかになる由緒正しきオデュッセウスの家に連なるものであることをはっきりと表明する。メンテスは、生まれのことにはそれ以上触れず、オデュッセウスの家が現在置かれている状況に目を向ける。求婚者たちの傍若無人なありさまについて、「心ある者がこの場に居合せ、この醜態を悉く目にすれば、さぞや憤慨することでしょう (*Od.* 1. 228-229)」と言って、この家の状況の異常さを客観視させようとしている。そして、テレマコスから事情を聞くと、求婚者どもに鉄槌を下すべきオデュッセウスにぜひとも帰ってきてもらわなければならないと言い、メンテスが初めてオデュッセウスと会ったときの勇猛な様子を描写することで、父親のイメージを具体的に想起させる。そのうえで、「わたしからあなたにおすすめしたいことは、いかにして求婚者どもをお屋敷から追い払うか、それを思案なされることだ (*Od.* 1. 269-270)」と述べて、テレマコス自身が為すべきことを示唆する。このように、メンテスは、テレマコスの父に対する深層での思慕に寄り添いながら、父親であるオデュッセウスの勇猛な姿を想起させたうえで、テレマコス自身が父の代わりに為すべきことがあることを考えさせるのである。メンテスの言葉の運びには、ここでテレマコスにオデュッセウスをパラダイグマ（範例）として想起させたうえで、テレマコスの為すべき行動を具体的に示していこうとする意図がうかがえるのである。さらに、メンテスによって意図された「父」の想起は、さらに、彼の指示したネストルとメネラオスのもとへの旅によっていっそう確実なものになっていく¹¹。古代ギリシアのアテネにおける父子関係を分析した Strauss は、テレマコスを例に、

10 拙訳

11 現に、『オデュッセイア』第2巻～第4巻のテレマコスの旅においては、オデュッセウスの消息については、ネストルからもメネラオスからも確たる情報が得られないが、テレマコスは、その容姿からオデュッセウスの子であることに違いないことを指摘され、さらに、オデュッセウスの武勇譚を聞かされ、「父」をより具体的に想起できるようになっていく。

若者が、年長のメンターの導きによって、失った父の面影を自らを奮起させるロールモデルとして見出していたであろう、そして、父を失った場合であっても、息子は父のイメージと競い合い、強い内なる監督者としての父のイメージを見出したであろうと指摘している¹²。

テレマコスにとっての「父」の想起は、もうひとりメンテス自身の姿にも投影されている。テレマコスが、メンテスの助言に対し、「父親がわが子に語るような (*Od.* 1. 308)」と形容しているのもその表れである。青年の導き手である年長者もまた、「父」の面影を宿すものであることは、古代ギリシアのひとつの教育の型として指摘できる。

(2) 「言葉」と「行い」の教師

メンテスは、対話のなかで具体的にテレマコスがとるべき行動を教えていくのであるが、そこにおいて、「言葉」と「行い」の教育の場が提示されている。メンテスは、テレマコスに対してふたつのことを話す。まず、アカイア人の集会を開くことを勧めるのである。その集会で、求婚者たちに自分の所領に引き上げるよう求めよと言う。このアカイア人の集会について、M. I. Finley は、イタケ島の正規の議会を招集せよと言おうとしたのだと指摘している¹³。つまり、ここでメンテスは、テレマコスが成人として、正式に議会を招集する、すなわち、公的な場を設け、そこで公式に発言するように求めているのである。この公的な発言の場こそが、「言葉」の教育の場なのである。

続けてメンテスは、「それからあなた御自身には一つよい策を献じよう (*σοί δ' αὐτῷ πικινῶς ὑποθήσομαι*) (*Od.* 1. 279)」と言い、最上の船を選び 20 人の漕ぎ手をそろえて、ピュロスへ行ってネストルに会って父の消息を尋ね、さらにスパルテに赴いてメネラオスを訪ね父の消息を聞くように言う。そして、父が存命であり、やがて帰国すると聞いたのであれば、あと 1 年は辛抱できるであろう、また、もし父が死んだと聞いたならば、国元に帰り、父の墓を築いて葬儀を行い、母を再婚させるようにと言う。ここで用いられている動詞 *ὑποθήσομαι* はまさに「私が教えよう」という意味に解される¹⁴。さらに、メンテスは、最後に、「はかりごとを用いるか、あるいは正々堂々と戦うか」、いずれにせよ求婚者たちを討つ手立てを考えるように言う。そして、テレマコスに対して、「子供じみた振舞いがあるてはなりませぬぞ、あなたはもうそのような年頃ではないのだからな (*Od.* 1. 296-297)」と言う。この旅と求婚者討伐こそが、テレマコスを自立させ、一人前の大人へと成長させるための「行い」の場なのである。テレマコスに大人としての「行い」をとるように勧め、母親への依存からの離脱、子どもからの脱皮を促しているのである。

このように、アカイア人の集会を開き公的な場で意見表明すること、英雄ネストルとメネラオスを訪ねる旅のなかで年長者に対する挨拶や礼儀をわきまえた振舞いを学ぶこと¹⁵、そして、求婚者たちに対する報復の手段を考え報復を実現することは、すべてメンテスが提示した「言葉」と「行い」の教育の場において実現していくことである。Marrou は、『イリアス』第 9 巻においてポイニクスが

12 B. S. Strauss, *op. cit.*, p. 80.

13 M. I. Finley 『オデュッセウスの世界』(下田立行訳) 岩波文庫 (東京: 岩波書店, 1994 年) (原書名: *The World of Odysseus*. New York, 1954), 42 頁.

14 W. Jaeger, *op. cit.*, p. 425, n. 56.

15 この教育は、『オデュッセイア』第 2 巻～第 4 巻において、女神アテネの化身メントルを師傅として展開される。

語った「弁論巧みな者となるように、そして、武功を立てる者となるように (μύθων τε ῥητῆρ' ἔμμεναι πρηκτιῆρά τε ἔργων) (Il. 9. 442-443)」という言葉こそが古代ギリシアにおける「完全な騎士の二重の理念を要約した公式」であり、「ギリシア文明の本源において、明確に定められた教育の型」であり、そして、「若い貴族が、その教育を託された年長者の助言と手本によって身につけた型」であるとして、メンテスもテレマコスに同じことを教えていると指摘している¹⁶。テレマコスの場合、期待されている武功は戦場におけるものではないけれども、『オデュッセイア』第16巻以降のオデュッセウスとの再会と父子協力しての求婚者討伐は武功に匹敵するものとして実現していくのである。このように、現実社会において実際に「言葉」と「行い」を身につけていくことによって、青年は大人としての振舞い、自ら行動する指針を身につけていくことが期待されるのである。

(3) パラダイグマ(範例)を語る教師

テレマコスの教育においては、パラダイグマが効果的に用いられている。メンテスは、ふたりのパラダイグマをテレマコスに提示している。

一人は、先述したように父オデュッセウスの姿である。メンテスは、父オデュッセウスの姿を「今もしお父上が帰国なされて、兜を戴き楯をかざし、二本の槍を携えて、屋敷の門口に立って下されたら (Od. 1. 255-256)」と具体的にテレマコスがイメージしやすい仕方で語り、そのうえで、それがメンテス自身がオデュッセウスに初めて会ったときの姿であり、それが「青銅の鎌に塗る致死の毒 (Od. 1. 261-262)」を求めての旅の途次にあるオデュッセウスの姿であったことをテレマコスに話すのである。この父の姿こそ、オデュッセウスの勇武と知略を示す象徴的な姿である。

さらに、メンテスはもう一人のパラダイグマを提示する。それは、父アガメムノンの仇討ちを果たした彼と同年輩のオレステスである。メンテスは、「あなたは聞いておられぬのか、かの健気なオレステスが、父の仇、勇名高き彼の父親を殺した姦佞のアイギストスを討ち果して、その名を天下に轟かしたことを。お見かけするに、あなたは実に立派なよい体格をしておられる。後の世の人にその名を称えられるよう、勇気をお出しなさい (Od. 1. 298-302)」と述べる。のちに、テレマコスがネストルのもとを訪ねた折にも、ネストルが同じようにテレマコスを鼓舞している (Od. 3. 196-200)¹⁷ ことから、オレステスのパラダイグマが重要な意味をもっていることがわかる。Jaegerはこのパラダイグマについて、アキレウスにとってのメレアグロス神話が古い英雄の話であったのとは異なり、テレマコスにとってのオレステスは同時代の実在の人物であり、それだけにテレマコスを従わせるに足る強い範例となっていると述べている¹⁸。また、さらに久保正彰は、オデュッセウスの名声はまばゆいが遠くの彼方のことで直接の手本とはまだなり得ない、しかし、同世代のオレステスの功名は手をのばせば届くところにあるとし、少年の直接の努力目標が立派な大人になることではなく、少年の目指す手本は、同年輩のすぐれた少年であることを指摘している¹⁹。このオレステスのパラダイグマは、テレマコスと同じような境遇に置かれた同年輩の青年の行いとその功名という点で、オデュッセウス

16 Henri-Irénée Marrou, 前掲書, 18頁.

17 テレマコスを鼓舞するメンテスの言葉である Od. 1. 301-302 とネストルの言葉である Od. 3. 199-200 は全く同じ表現が使われている。

18 W. Jaeger, *op. cit.*, pp. 32-34.

19 久保正彰, 前掲論文, 114頁.

のパラダイグマ以上に、身近な目標として、テレマコスにとって大きな教育効果をもつパラダイグマであったと考えられる。

パラダイグマについてまとめてみると、ホメロスが「ギリシアの教師」として、英雄の先例「パラダイグマ」を通して、「英雄の「卓越性」(ἀρετή)という理想のモデルを示してやまなかった」とMarrouが述べている²⁰ように、ホメロスにおけるパレダイグマの範囲が、神話的な人物から同時代人に至るまで青年の範となりうる人物像から幅広く選択され、それらの人物の卓越性が、模範として青年の心に刻まれ、行動の指針として教育的に作用することが期待されていることがわかる。

(4) 教師の助言を全面的に受け入れる生徒

テレマコスは未熟ではあるが、素直な生徒である。そして、初対面のメンテスに対しても心を開き、自分の抱える問題についてもかなり立ち入った話をし、自らの悩みを打ち明ける。もちろん、客人の目に見えるところで、求婚者たちの醜態が繰り広げられていたわけであるから、そのことについて客人に説明する必要を感じたであろうし、また、ひとりの青年として、年長者を師として何かアドバイスをもらいたいという気持ちもあったであろう。テレマコスは、自分の力で事態を解決しようという意識がないだけ、年長者を頼り、年長者の指示に従う気持ちを潜在的に強く持っている青年なのである。つまり、テレマコスは、教育可能性という面から考えると極めて教育されやすい性格の青年なのである。テレマコスはメンテスの助言を、父が子に語るような「温かいお言葉 (Od. 1. 307)」として受け取り、「お言葉は決して忘れますまい (Od. 1. 308)」と言うのである。テレマコスはメンテスの助言を全面的に受け入れる。そして、その助言に従うことで、自信を得て勇気と行動力をすぐさま発揮するのである。メンテスの助言は、テレマコスに行動のきっかけを与えたにすぎないが、しかし、今後の行動の指針が明確に示されており、テレマコスがこのあと、どう行動するべきかに迷うことのない助言になっている。つまり、自ら行動を起こすことに思い至らず、また、どう行動したらよいかわからない青年に対して、青年の主體的な判断にまかせるのではなく、明確な道筋を指し示しているのである。テレマコスは、教師メンテスの助言を全面的に受容し、その指示の通りに忠実に行動することによって、自立を達成していくのである。テレマコスの未熟さや自立心の乏しさが、逆に教育的な言葉を受容する前提、教育の成功のきっかけとして作用していることは注目に値する点である。アキレウスとの比較において、この点については、のちに、さらに検討したい。

4. メンテスによるテレマコスの教育とポイニクスによるアキレウスの教育

ここで、『オデュッセイア』第1巻におけるメンテスによるテレマコスの教育を、『イリアス』第9巻におけるポイニクスによるアキレウスの教育と比較してみたい。先にポイニクスの教師像を分析した際、

- ① 「言葉」と「行い」の教師
- ② 我が子を慈しむように子どもを慈しむ教師
- ③ 自らの弱みを隠さない教師
- ④ パラダイグマ(範例)をもって語る教師

20 H. I. Marrou, 前掲書, 24頁.

- ⑤ 既存の社会規範や倫理の枠組を守る教師
- ⑥ 意を尽くして語っても、教え子に受け入れられることのない教師

の6点の特質を指摘した²¹。

これらの特質をもつポイニクスの教師像と、これまで検討してきたメンテスの教師像の共通点と相違点を検討することを通して、ホメロスにおける教育理想の一端を明らかにしてみたい。上記①②④の特質は両者の共通点として指摘でき、⑥の特質は両者の際立った相違点として指摘しうる。③⑤の特質については、ポイニクスの人間性にかかわる点が多く、本質的には神であるメンテスとの比較はあまり意味がないと考えられるので、ここでは検討しない。まず、共通点から見ていこう。

メンテスとポイニクスの共通点としてはっきりしているのは、両者がともに、「言葉」と「行い」の教師であること、及び、パラダイグマをもって語る教師であることである。この2つの特質は、ホメロスの描く貴族的理想を追求する教育において、もっとも重要な要素と考えてよい。そして、「言葉」の教育とは、公式な場において正式な作法に則って語ることをできることを目標とする教育であり、「行い」の教育とは、直接的には戦いにおける振舞い方の教育であり、広くは、公的な場における振舞い全般を包含する教育であると見ることができる。さらにパラダイグマについては、青年の目指すべき人間像（テレマコスの場合のオデュッセウスとオレステス）あるいは避けるべき人間像（アキレウスの場合のメレアグロス）、すなわち、そのときの被教育者の状況にふさわしい人間像が、神話から同時代人までに至る広い範囲から渉獵されて、教育に生かされていることがわかる。この「言葉」と「行い」の教育、及び、パラダイグマによる教育は、JaegerやMarrouらが指摘するように、ホメロスの描く教育の重要な要素である。

また、メンテスもポイニクスも「父」を想起させる存在であることも共通点として指摘できるであろう。メンテスの場合は、自らが「父」であろうとしているわけではなく、テレマコスがメンテスの助言をさながら「父」の言葉として受け取るのである。ポイニクスの場合は、自らがアキレウスの「父」でありたいと願い、我が子のようにアキレウスを慈しむのである。このように両者の特質は異なるが、ともに、年長者と青年との教育関係が、父子関係を想起させるものであることは重要である。父と子という基本的な人間関係が、教師と生徒の関係の底流として意識されていることは、古代ギリシアの教育、ひいてはその影響を受けた西欧型の教育を考える際に重要な視点となるであろう。

次に両者の相違点について考えてみたい。もっとも異なることは、ポイニクスの助言は、アキレウスには受け入れられず、メンテスの助言は、テレマコスに全面的に受け入れられるということである。両者の相違を検討してみたい。まず、アキレウスに対するポイニクスの言葉は成熟した大人に対するかつての師傳の説得である。したがって、子どもに対するようには受け入れられないことは自明であり、説得を受け入れるかどうかはアキレウス自身の判断によることになる。これに対して、テレマコスは年齢的には成年であるが内実は未熟な青年であり、彼には自分で状況判断して行動する力はない。アキレウスの教育はすでに完成しており、テレマコスの教育は緒に就いていない。この状況の違いが、ポイニクスにアキレウスの説得を失敗させ、メンテスの助言はテレマコスに受け入れられた原因であると指摘することができる。しかし、さらに、この教育の失敗と成功の影響を、『イリアス』『オデュッセイア』のその後の展開から探ってみると、教育に関するある重要な視点がうかがいあがってくる。

21 鈴木円, 前掲論文, 90-95頁.

まず、ポイニクスがアキレウスの説得に失敗した結果、アキレウスは戦場に戻ることはしない。その結果、彼の親友のパトロクロスがアキレウスの代わりに戦場に出て討死するのである。アキレウスが戦場に出れば、彼が死すべき運命に捕えられることは、母テティスの予言によって明らかなことではあったが、もしポイニクスの説得を受け入れていれば、少なくとも親友パトロクロスの死という悲劇は避けられた可能性があるのである。一方、テレマコスには、メンテスの助言を受け入れた結果、自信と勇気に満ちた青年となり、帰還した父オデュッセウスを助けて、求婚者たちを討伐し、父とともにオデュッセウス家に安寧をもたらすという喜ばしい結末を迎えるのである。もしも、ポイニクスによるアキレウスの教育と、メンテスによるテレマコスの教育を対比して考えることが許されるとすれば、年長者による教育の成否がその後の彼らの運命を左右していると考えられることのできるものである。ここに、ホメロスの描く世界における教育の意味が暗示されているとみなすこともできよう。年長者の言葉を受け入れる青年の運命は開け、受け入れない者は過酷な運命にさいなまれるというメッセージをここから受け取ることは牽強附会に過ぎるであろうか。

まとめと今後の課題

これまで、メンテスによるテレマコスの教育について検討し、ポイニクスによるアキレウスの教育との比較も試みたが、古代ギリシアの教育のひとつの典型的な型をホメロスの描く世界が示しているばかりではなく、西欧世界、ひいては、西欧文化の影響を受けた我が国の教育を考える際にも、このホメロスの描く教育は示唆を与えてくれるように思われる。

まず、「父」を想起させる教育という面では、やはり、教育関係が親子関係における愛情をその基礎にもっているものであり、教育者と被教育者がともに親子に匹敵する愛着を感じ合うものであると捉えることは、我が国の現代の教育にとっても示唆的であろう。

また、「言葉」と「行い」の教育、とくに「言葉」の教育が、公的な場における公式な言葉が遣えることという限定的な意味で考えられていることは重要である。今日の我が国の教育においても、言語活動の充実が重要な要素となっており、「言語」が知的活動、感性・情緒、コミュニケーションのすべてに関わるという認識で言語活動を取り扱っている。それはその通りであろうが、しかし、「言語」の機能を限定して考えない限り、教育が焦点の定まらないものになってしまうのではないかと危惧するのである。その点で、古代ギリシアにおいて、「公的な場できちんと話すことができること」を明確な目標として、「言葉」が教育されていることは示唆的である。

さらに、パラダイグマは時代を超えて、教育の型として重要な意味を持ち得るのではないかと考える。メンテスの語るパラダイグマは、今日的に言えば、メンターの語るロールモデルということになる。どのようなロールモデルを子どもたちに与えていくべきかということは、時にロールモデル不在を指摘される我が国の教育においても真剣に検討されてよい課題ではないかと考える。

最後に、テレマコスの被教育者としての性格づけは象徴的である。昨今の我が国の教育では、被教育者の主体性が求められることが多いようだが、テレマコスは全く主体的でない、かつ主体的でないがゆえにメンテスの教育が功を奏するのである。さらに、メンテスはテレマコスに主体的に行動することを求めるよりも、自分の助言する通りに行動することを求めている。教師メンテスの指示の通りに動こうとすることによって始めて、青年テレマコスは主体性を獲得するのである。今日の我が国の学校教育が、子どもに主体性を求めるあまり教師が指示を与えることに躊躇し、そのために学習が

散漫になりがちであることはまま指摘されることであるが、やはり、子どもの主体性を前提とするのではなく、教師が明確に指示を与え、その通りに子どもが行動することを通して主体性が身についていくとするホメロスの描く教育は一考の余地があるのではないか。メンテスによるテレマコスの教育から学ぶべき点は、細かく見れば他にも多く見出されるであろう。

今後の課題としては、ひきつづき、『オデュッセイア』第2巻から第4巻のテレマコスとメントルの教育関係を検討すること、及び、他の古代ギリシアの古典作品に現れる教育関係を検討し、現代の教育に対する示唆を得ることである。

本論文を結ぶにあたり、テレマコスとメンテスの別れの瞬間の様子を記しておきたい。

眼光輝くアテネは、こういうとその場を去り、鳥の如く上方へ飛び立ったが、女神は若者の胸に力と勇気を打ち込むとともに、彼の父への想いを以前よりさらに募らせておいた。テレマコスは心の中でそれに気付くと、さては神であったのかと、胸は驚異の念に満たされ、早速求婚者たちの方へ歩み寄ったが、その姿は神と見紛うばかり、堂々たる男振りであった。(Od. 1. 319-324)

教師の言葉によって明確に行動の指針を与えられた青年がこのように変容する姿は、まさに時代を超えた教育の理想と言っても過言ではないのではなかろうか。

参考文献

Homeri Opera. Tomus iii, *Odysseae libros i-xii continens*. editio altera (recognovit brevique adnotatione critica instruxit T. W. Allen). Oxford, 1917.

Homeri Opera. Tomus iv, *Odysseae libros xiii-xxiv continens*. editio altera (recognovit brevique adnotatione critica instruxit T. W. Allen). Oxford, 1919.

『ホメロス オデュッセイア (上)』(松平千秋訳) 岩波文庫, 東京: 岩波書店, 1994年.

『ホメロス オデュッセイア (下)』(松平千秋訳) 岩波文庫, 東京: 岩波書店, 1994年.

『ホメーロス オデュッセイアー (上)』(呉茂一訳) 岩波文庫, 東京: 岩波書店, 1971年.

『ホメーロス オデュッセイアー (下)』(呉茂一訳) 岩波文庫, 東京: 岩波書店, 1972年.

Alden, M. J., "The Role of Telemachus in the 'Odyssey'." *Hermes: Zeitschrift für Classische Philologie* 115(2), 1987, pp. 129-137.

Clark, M., "Was Telemachus Rude to His Mother? "Odyssey" 1. 356-59." *Classical Philology* 96(4), 2001, pp. 335-354.

Cross, S., "Roots and Wings: Mentoring." *Innovations in Education and Teaching International* 35(3), 1998, pp. 224-230.

Eckert, C. W., "Initiatory Motifs in the Story of Telemachus." *The Classical Journal* 59(2), 1963, pp. 49-57.

Fénelon, F., *Telemachus, son of Ulysses*. (edited and translated by Patrick Riley). Cambridge, 1994.

Finley, M. I. 『オデュッセウスの世界』(下田立行訳) 岩波文庫, 東京: 岩波書店, 1994年. (原書名: *The World of Odysseus*. New York, 1954.)

Heubeck, A., S. West, and J. B. Hainsworth, *A Commentary on Homer's Odyssey*. Volume I. Oxford, 1988.

Jaeger, W., *Paideia: the Ideals of Greek Culture*. Volume I, second edition (translated by Gilbert Highet). Oxford, 1945.

- Kirk, G. S., *The Songs of Homer*. Cambridge, 1962.
- 久保正彰「古典古代における子どもの発達と教育—ホメロスの両叙事詩を中心として—」大田堯他編『岩波講座 子どもの発達と教育 2 子ども観と発達思想の展開』東京: 岩波書店, 1979年, 98-125頁.
- 久保正彰『「オデュッセイア」伝説と叙事詩』東京: 岩波書店, 1983年.
- Marrou, H. I.『古代教育文化史』横尾壮英・飯尾都人・岩村清太訳, 東京: 岩波書店, 1985年, (原書名: *Histoire de l'éducation dans l'Antiquité*. Paris, 1948).
- 松本仁助「アテーネーの「忠告」 α 271-296」『西洋古典学研究』第14号, 1966年, 42-56頁.
- 松本仁助「テーレマコスの「奮起」 α 319-444」同志社大学人文学会『人文学』第101号, 1968年, 1-26頁.
- 松本仁助「テーレマコスの「駆け引き」 β 209-223」同志社大学人文学会『人文学』第110号, 1969年, 1-26頁.
- 松本仁助「テーレマコスのスパルテー滞在: δ 587-619, ν 412-428, \omicron 1-184」『西洋古典学研究』第19号, 1971年, 16-30頁.
- 松本仁助『「オデュッセイア」におけるテレマコスの旅』『同志社外国文学研究』第21号, 1978年, 1-24頁.
- 松本仁助『「オデュッセイア」におけるテレマコスの帰国』『同志社外国文学研究』第23号, 1979年, 97-109頁.
- Millar, C. M. H. and J. W. S. Carmichael, "The Growth of Telemachus." *Greece & Rome*. Second series 1(2), 1954, pp. 58-64.
- 村田真弓「Télémaqueを読む—神秘思想家フェヌロン—」『フランス語フランス文学研究』第51号, 1987年, 17-25頁.
- 村田真弓「フェヌロンとホメロス」『お茶の水女子大学人文科学研究』第5号, 2009年, 81-93頁.
- 岡道男『「オデュッセイア」におけるテーレマコス』『西洋古典学研究』第13号, 1965年, 33-50頁.
- 岡道男『ホメロスにおける伝統の継承と創造』東京: 創文社, 1988年.
- Petropoulos, J. C. B., *Kleos in a Minor Key: The Homeric Education of a Little Prince*. Washington, D. C., 2011.
- Roberts, A. and A. Chernopiskaya, "A historical account to consider the origins and associations of the term *mentor*." *History of Education Society Bulletin* 64, 1999, pp. 81-90.
- Strauss, B. S., *Fathers and Sons in Athens: Ideology and Society in the Era of the Peloponnesian War*. London, 1993.
- 鈴木円「ポイニクス（『イリアス』第9巻434-605行）にみる教師像」『学苑』第844号, 2011年, 86-97頁.
- 渡辺かよ子「米国におけるメンタリング運動の誕生と発展の素描: BBBS運動を中心に」愛知淑徳大学大学院現代社会研究科『現代社会研究科研究報告』第1号, 2006年, 89-101頁.
- Wissmann, J., "Athena's "Unreasonable Advice": The Education of Telemachus in Ancient Interpretations of Homer." *Greek, Roman, and Byzantine Studies* 49, 2009, pp. 413-452.
- 安村典子『「オデュッセイア」21巻の弓競技におけるテーレマコス』『西洋古典学研究』第55号, 2007年, 24-37頁.

(すずき まどか 初等教育学科)